

しんこう

(題字：植田美夫)

発行人 植田美夫
編集人 中原悠司
原 洋志 小林 博
白石富男 泉 善高
奥村忠道

時代の流れ見据えて

一般社団法人 進交会 理事長 秋谷 淨恵 (昭35商)

横浜商業高校（Y校）が昨年、創立130周年を迎えたことはご同慶に存じます。1世紀を超える永き歳月の間、毎年学窓を巣立ったOBの皆様が、地域社会や地域経済に貢献されておられることは、これまでも増して誇りに思っているのではないのでしょうか。



また、横浜市立大学（YCU）も毎年、1,000人を超す卒業生を社会に送り出し、国際化が進む社会にあって、大学の枠組を超えた立場で活躍するOBが、新たな歴史と伝統を築きつつあります。

このたびは、このような良き伝統を誇る両母校の同窓会である進交会の理事長に就任し、あらためて身の引き締まる思いです。この進交会はいままでもなく、公立高校であるY校と公立大学法人YCUの卒業生を併せた同窓会という、全国にも例を見ない組織です。先年の理事就任時は、いささかその運営に戸惑いも感じましたが、Y校、YCUともに国際化社会への対応に大変な努力をされていることを目の当たりにするにつけ、我々OBも時代の流れをしっかりと受け止めていかなければならないという思いを強くしました。

進交会は、会員相互の親交を図るとともに、母校や地域社会の健全なる発展に貢献するという目標が、一昨年的一般社団法人化に際し、あ

らためて確認されています。

JR桜木町駅近くにある進交会館は、交通アクセスの便利さからこれまでもクラス会や趣味の会等々に活用されてきましたが、さらに同窓会活動の拠点としてその積極的な活用が望まれるところです。そしてOBとして、いっそう母校の近況に関心を持ち、国際都市・横浜の大学、高校の出身なのだというを、これまで以上に誇りにしたいと思います。ひいては横浜市民の皆様が、両校の存在を誇りに思ってくれることになればこのうえない幸せと考えております。最後になりますが、若い方々、女性の皆様の積極的参加、大歓迎です。お待ちしております。

Y校創立130年にあたって

時代に対応した変革も

横浜商業高校校長 山本 一夫

進交会の皆様方には、日ごろからY校の教育活動にご支援・ご協力をいただき、ありがとうございます。



さて昨年、Y校は創立130周年を迎えました。明治15年、横浜の港に近い北仲通りに創設された横浜商法学校は、紆余曲折を経て130年の年輪を築き上げ、現在に至りました。卒業生は約3万人に達し、横浜の経済人をはじめとする社会のリーダーとして活躍さ

れている方々が多数いることは、在校生・教職員にとっても大きな誇りであります。初代校長・美澤進先生の「誠の精神」は、今も引き継がれ、Y校の人権教育の柱にもなっています。130年で培われた伝統と校風、歴史と文化をもとに、将来に向かってさらに充実した教育を発信しなければならないと思います。高校時代に実学を学び、自分ができることを明確に意識することは、その後のキャリア形成に優れた効果をもたらします。教育革命といえる時を迎えた昨今、Y校のさらなる発展のために、専門教育の中身を一層精選し磨きをかけ、商業科は高度なビジネス教育の実践、国際学科は高い英語力とコミュニケーション能力育成を目指し、魅力ある学校づくりに尽力しなければなりません。

平成25年度からの新しい高校入試制度の適用で、Y校の教育内容が改めて注目を受けます。普通科志向が強まる中、Y校の130年の歴史と伝統の中で、大切に残し磨きをかけていくべきものと、時代の変化に対応して変革していく

べきものを識別していく必要があります。

現在、「横浜市立高校教育振興プログラム」による平成26年度から開設予定の「スポーツマネジメント科」の教育課程を策定しています。ビジネス教育の基礎・基本を学ぶとともに、スポーツを幅広くとらえ、キャリア教育の一環として、その力を伸ばしていこうとするものです。こうした動きが、Y校に学び、学ぼうとする生徒のためであることを確認しながら、人と人が出会いとともに育っていく集団を大切に、変革の時であるという認識を教職員と共有し、前進していきたいと思ひます。



Y校校舎全景

創作 小説 「告知」

昭46商 森山 茂 (生駒市)

(1)

お決まりの「告知」という言葉が一郎を悩ませたのは、体調が悪くなって入院した日から数日後のことだった。もうこのことは悩むまいと頭では分かっているけれども、どうにも心の整理ができないことはいかんとできず、悶々とした毎日を過ごしていた。

そう思って妻の君枝を見るせいか、一郎が心配を感じてそれとなく問い質したのだが、君枝はそれには応えず、「大丈夫ですよ」と、慰めとも聞こえる言

葉を繰り返していた。

ガンなどという厄介な病気ではないと、自らに言い聞かせて病床に伏せていた一郎だが、その朝に限ってはひどくその病名が魔物の如く一郎の心に襲いかかったのだ。ベッドでうつらうつらしている時急に咳き込み吐いた。吐瀉物は寝ていたベッドのシーツを汚しただけではなかった。血の混じったそれが一郎の口の周りにへばりついた。数分のはずだが、もう一郎には、枕元にある看護師を呼ぶブザーを押す気力は残っていなかった。そのまま気を失った。

どれほど気を失っていたか、一郎は分からなかつ



たが、気がついた時ベッドの周りに人影が数人見えた。何が起こったかは臆に頭の片隅に残ってはいるが、それが重大な病気の兆しとは一時前には分からず、今意識がはっきりしてからは、医師の言葉を待つまでもなく悟った。もう「告知」は要らぬ。一郎は自分を納得させた。

「あなた気が付かれたのですね。」

君枝のいつもの澄んだ声が一郎の気持ちをやわらげた。

病室の窓から差し込む柔らかな光が一郎の気持ちを落ち着かせた。

“自分はガンなのだ。初期か進んでいるのか……。”この思いが一郎の頭を駆け巡った。

「あなたしばらく眠られたらいいわ。私はここにいますから。」

君枝の言葉に一郎は素直に従った。

“もう悩むまい、「告知」は無用だ。”一郎は自分の言葉を頭の中で反芻した。

(2)

一郎が目を覚ましたとき、すでに医師と看護師が適切な処置を施していたが、医師の口からはただ「肺の組織にダメージがあると思われます。2、3日中にレントゲンを撮りましょう」とだけ聞かされた。一郎にはその判然としない言葉に、更に詳しい説明を求める元気はなかった。

あの事件以後、自分はガンなのだと自らに伝えた。しかし「告知」はされたくなかった。ガンは死病であり、「告知」は自分にとって精神的に耐えられないと思った。今、ガンは早期発見なら生存率は一頃より上がっている。しかしガン細胞を完全に取りきることは不可能だという。だが先進医学の恩恵は信じてもいいという気持ちは一郎にもないことはない。ただ、あなたはガンですという無機質な言葉を一郎は嫌悪した。治療を受ければ死ぬことはないかもしれない。少なくとも今ならば。だが一郎にとって「告知」はすなわち死の宣告に思えた。患者には自分の病気を知る権利がある反面、知らないでいる権利も



あるはずだ。「告知」を拒否する自由がある。一郎はそう信じている。

「ガンとは何なのか」という素朴な疑問を自分にぶつけることがある。ある時読んだ本に、“細胞内の遺伝子が突然変異することで、無限に増殖する細胞に変化してしまったのがガンの正体だ”とあった。“無限に増殖する？”一郎はこの言葉が頭から離れない。ガン難民とか日本では使えない新薬などという表現も耳に残っている。そして患者が本当に望む治療が、病院で行われているのだろうかとい一郎は懐疑的になるのである。

医師には君枝を通じて病名を言わないでくれと伝えていた。医師は当初困惑していたが、「患者さんの意思を尊重します」の考えで一郎の希望を受け入れていた。

しかし実のところは、事件のあとのレントゲン検査の“肺ガンが進んでいて治すことがむずかしい”との診断結果を一郎に伝える機会を見計らっている折に、一郎の申し出があったのである。

(3)

一郎の父親は20年前、肺ガンを患い68歳で亡くなった。その当時はいわゆる「手術」「抗がん剤」「放射線」の三つががん治療の柱であった。それは基本的に今でもそうである。父親は医師の言われるままその治療のルールに乗った。入院後手術が行われ、病巣は取れたとの医師の説明があった。そしてその後抗がん剤治療が始まり、3ヶ月ほどで“治った”と思われる病状の改善が見られ、一郎は母親と喜んだ。しかしそれも1ヶ月と続かず、父親は食事を取れなくなり点滴が行われた。やせ方は急だった。医者の見方は甘かった、と一郎は憶えている。父親は入院後半年で亡くなった。

一郎には今でも思っていることがある。あの「告知」はしなければよかったということ。

父親には入院後、「告知」するかどうかで一郎の兄と母親とで相談したことがある。医師からガン宣告を受けたのである。

二人は知らせるべきだと主張した。万一死ぬことになっても悔いのないようにさせてあげたいと言

張った。父親は国文学者で、万葉集の歌を独自の解釈で著すことに心血を注いでおり、それを成し遂げさせてあげたいということだった。それは父の跡を追うかのように、同じ分野の研究者の道を選んだ一郎も同じ思いだった。一郎は地方にある小さな私立大学に教職を得ていた。

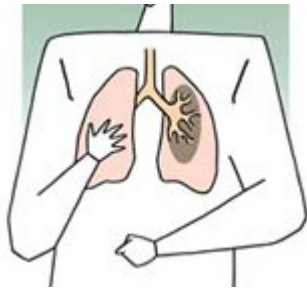
しかし父親はひどい神経質であることが一郎に同意をためらわせた。父親は若い頃うつ病を患ったことがある。病名を知らせると気落ちしてしまい、研究どころかガンが進むのではないかと危惧したのである。ストレスが免疫力を減退させることを一郎は知っていた。医師にそのことを確認し二人に考えを伝えたが、結局受け入れられなかった。免疫力の低下が災いしたかどうか判らないが父親は亡くなった。その時の経験が一郎に「告知」のジレンマを植え付けたのかもしれない。

父親の死を経験した時、一郎は親孝行ができなかった後悔の念が様々に湧いた。父親の死んだ時の年齢に近づいていく今、若い頃には思わなかった老いと死の現実感に直面している自分がそこにいた。ガンは遺伝するという生半可な知識にも一郎はおびえていた。自分の死の恐れを克服できない自分もそこにいた。

(4)

一郎の気持ちは日の経過とともに徐々に平らかになっていった。苛立ったりしたり、落ち着きのないという状態を脱却したかのようだった。しかし脳裏にあるものは不安であり、私はガンなのだという思いは片時も消えることはなかった。

携帯が君枝からの受信を伝えていた。文面は、長男の健一がアメリカから帰ってくるという。子供は一人しか恵まれなかったが、国立の大学を卒業してすぐ、法律の勉強の為渡米した健一は一郎の自慢だった。しかしもう5年になる。いつ弁護士なり裁判官なりの定職を得るのか心配の種ではあった。一時



帰国なのかは分からなかったが、とにかく久しぶりに息子の顔を見ることができるのは一郎の喜びだった。入院していることは伝えていない。久しぶりに帰る息子が、父親がガンかもしれないと知ったらどう思うか、一郎は喜びの反面、不安も感じた。

君枝と所帯を持ったのは一郎が29歳の時だった。君枝は三つ下である。一郎は初婚だが君枝は再婚であり、前夫との間に子供はなく、前夫とは死に別れだった。ガン死だった。

未亡人だった君枝と知り合ったとき、奥ゆかしい女性であることに好感を持ち、一郎にとってその上に、君枝の美貌に強く惹かれたことが結婚を後押しした。

健一は果たして病室のドアをノックして入ってきた。空港から直行したものらしい。君枝がすでに一郎が入院したことは連絡していた。

健一は父親の顔を見るなり、挨拶もそこそこに大きな声を発した。

「父さん入院したなんて驚いたよ。」

「そうたいしたことないんだ。仕事のし過ぎだと思おうよ。」

一郎は努めて言葉を選びながら明るく言った。

「まあ、し過ぎだなんて・・・。」

君枝は言葉をはさんだ。君枝は、一郎が研究で大学からの帰宅が遅いことを承知しているのに、と一郎は思ったが、息子を心配させない親心と見抜いてだまっていた。

「父さんちょっとやせたようだね。あとどれくらい入院しているの？」

健一は無邪気に聞いた。たいした病気ではないと思っている様子は、一郎には救いだったが少し気落ちした。父親を心配する気配は分かるにしても、何か遠くから聞こえる声のような寂しさを覚えた。君枝は健一には、お父さんが体調を壊して検査の為入院したと伝えていた。

今までの一郎は健康管理にはどちらかと言えば無頓着で、はっきりした症状が出ないと病院の門をくぐることはなかった。

「大事をとっているだけで、もう暫く入っているよ。」

一郎は心配かけないようにさらっと返事した。

「そうなの……。長くいたいんだけど、今回数日しか日本にいられないんだ。」

「そうか……。そろそろ落ち着いた仕事につけるのか？」

「心配かけていたけど今ニューヨークの法律事務所で働いているよ。」

「そうか、よかったな。がんばれよ。」

久しぶりに顔を見る息子でも、自分の病状を知る一郎には、男同士の会話のそっけなさを修正することはできず、健一が幼い頃の姿が時折脳裏に浮かんでも、再会の喜びを増すことにはならなかった。異国で職を得ている息子に、「また来いよ」とは簡単には言えないもどかしさが一郎を苦しめた。

息子に会えた安堵の気持ちとともに、長の入院の不安がある一郎には、健一とこれがもしや最後の会話になるかと思えた。

(5)

自分勝手とも言える思いが一郎を自由にさせていた。病気であるという自覚以外に一郎を縛るものはなかった。「告知」されていない状況に身を置いていることが、自分はガンであるということを認めないでおく余地を残していた。

「告知」を拒むことで病人のレッテルを貼られまいとする、非現実の世界に漂いながら、このままずっと生きられるという錯覚に捉われているのだとしても、父親と同じ万葉集の研究が続けられる幸せの感覚を一郎はずっと持っていたかった。この漠とした状態にとどまっている限り、自分は自由なのだ信じた。

一郎はその時、現実と非現実の狭間で生きていることに、ある種の救いを感じていたのである。

自分はガンではないかという自問は根拠のないものではない。若い頃からのヘビースモーカーで日に30本は吸っていた。仕事が捗らない時など2箱は煙にしていた。吸いすぎとは思っていたが、つい手が煙草の箱に伸びた。君枝は再三吸いすぎを注意していたが、とくに応じる一郎ではなかった。

胸部の違和感は何年も前からあったが、仕事の忙しさにかまけて放っておいた。咳や痰は少なくは

なかったように思う。57歳になる一郎にそのつけが今きたのかもしれない。健康診断なるものには消極的だった。異常を告げられるのが怖かったのだと今になって思う。

今まで強い痛みは感じたことはなかった。ガンならば病状が進むと痛みが日常化し、夜の安眠が妨げられる。そして末期になると痛みが強くなる。そのくらいの知識は一郎にもあった。だから痛みが日常化していない自分はガンではないという一抹の希望を持ち、そこに安心感をみいだしていた。

しかしある日、経験したことのない激しい痛みを腰に感じた。

「長く入院してベッドに横になってばかりだから、きっと腰に負担がかかってきたのよ」

君枝は無邪気にそう言い放った。一郎はその言葉を素直には受け取れなかった。しかし君枝の口調には大丈夫よという温もりがあった。

「それだけならこんなに痛くなることはないはずだがなあ……。」

つぶやきとも訴えともつかぬ言葉を一郎は発した。不安の表情に変わった。

この痛みが尋常でないことに、一郎にも深刻な事態が起こっていることが分かった。今まで経験した程度をはるかに超える耐えられない痛みだった。

顔をしかめる一郎に君枝はさすがに動転して

「看護師さん呼びましょうか？」

「すぐ呼んでくれ……。」

一郎は搾り出すような口調でそれだけ言うとベッドに倒れこんだ。君枝は要領よく看護師に状況を伝えた。看護師がすぐに来て痛み止めの注射をしてくれた。

「暫くしましたら痛みはおさまります。」

それだけ言い残して看護師は室を出て行った。

「よかったわね。」

「うん……。」

痛みは徐々に引いていった。一郎は何か覚った気がした。そっと妻の手を取ってみた。君枝はやさしく握り返してきた。ふたりに沈黙のひとときが過ぎた。気がつく、病室の窓から見える泰山木の花の白さがまぶしかった。

(完)

登場する平凡な男は、ガンと言う病気に付随する「告知」ということに異常なまでの葛藤を見せる。男の過去の経験から紡がれた思い方は尋常でないかもしれないが、誰にも例外なく自分の生死について、いつか正面から見据える時が到来する。一郎にとって今がその時である。

妻の君枝や息子の健一とはごく普通のやりとりがある。しかし家族といえども自分以外の人間の悩みを拭き去ることはできないことに思いあたる。そして一人の人間が抱える問題には、自分ひとりで背負わなくてはならない苦しみもある。しかし同じ思いを共有することはできる。それが救いになる可能性を残してこの小説は終わる。

「告知」というと普通は、患者の家族が医師に呼ばれ病状を聞いた後、患者に伝えるか伝えないかを悩み決断する。ここでは患者自ら「告知」と自分の死の恐怖の狭間で苦悩する。

一郎は、自分はガンかもしれないという危惧を持ちながら、「あなたはガンです」という言葉が聞こえてこないうちは、“自分の人生の結末は、自分で責任を持って締めくくる”ことを自ら体現している。「告知」に翻弄される一人の人間が、最後は安穏な心境を得る。

(森山 茂)

閑話休題

社団法人「進交会」・横浜市立大学・Y校のある“横浜”と近畿進交会に属する“神戸”は良く似ていると思います。あなたは両市の共通点を何個あげられますか？

(共通点の例)

- 赤レンガ倉庫群がある
- 外国人墓地がある
- 展望台を備えたタワーがある
- Jリーグのサッカーチームがある
- 山手という地名がある
- 日本有数の港がある
- 人工島がある
- モルレルなど新世代の鉄道がある
- 東京・大阪という大都市に隣接する
- 中華街がある
- 先端的医療センターがある

中国・西安での思い出

昭40商 飯田 裕康 (奈良市)

ここ十数年、毎年1-2回は中国の博物館、遺跡巡りをしてきた。

日本が尖閣国有化宣言をした昨年(2012)の9月10日、私と妻は偶然、西安に居た。敦煌・西安ツアーに参加し、敦煌から西安に入った日の出来ごとだった。ホテルでテレビを見ると、日本が尖閣国有化宣言をし、中国が激しく反発しているニュースが流れた。

翌日(11日)翌々日(12日)になると朝から晩まで1日中「尖閣を取り戻せ」「小日本を攻撃せよ」「戦争だ」との激しい非難をCCTV(中国中央TV)が続けた。何となく不安な気になったが西安の町の様子は何事もなく平穏であった。インテリの物静かな女性ガイドの案内で楽しかった。

そのガイドに「昨年私はある企業の招待で西安に来て、高級官僚の晩餐会に招かれ豪華なレストランで究極のご馳走になった」と話すと、「悪の巣に行ったのですね」と言われてビックリした。共産党幹部、高級官僚、一部有力企業が行く場所は悪の巣と呼んでいるらしい。「我々市民は、汚職、格差、不正に対して大変な不満を持っている」と付け加えた。その時に思ったことは、中国国内の不満のガス抜きに、対日制裁へと誘導しているのではないかと。

9月13日、私と妻は西安から日本に無事に戻った。途中の機内で同乗していた中国人の団体ツアーの人数が政府の方針で3分の1に減ったとツアーガイドが言っているのを聞いて、何かいやな予感がした。

翌日の9月14日、中国全土で対日大暴動が起こった。西安でも、日本人宿泊ホテルが襲われたり、日本製自動車が破壊されたりしている映像を見て、心が痛んだ。これを境に、日中関係は一気に悪化した。何とか皆の努力で関係修復をしなければならぬと思っている1人です。

私は今年の3月初旬、友人と黄砂・PM2.5で問題になっている北京を訪れた。皆に何故こんな時に北京に行くのかと言われた。美の宝庫がある美術館に行くことが目的ですと答えた。



西安陝西省博物館にて

川 柳 「また明日」

昭36文 原 洋志 (高槻市)

役所にも あったらいいな
ロスタイム
デジタルの 窓に体型
合わせてる
バスを待つ いらちな影を
なだめつつ



ぐにゃぐにゃと 折れてビジョンの
意気地なし
水はけの 悪い頭を 道連れに
終電車 オレも未来も 置き去りに
輝いた 過去は時計に 食べられた
思い出に ときどきはたき かけておく
ときめいた 時間に付箋 つけておく
人生を やり直したい 塗り絵から
引き際は カーテンコール あるうちに
真っ直ぐに 生きているのに 落とし穴
乱気流 もがいて抜けた 現在地
アイロンで 縮んだ未来 引き延ばす
温かい 言葉で段差 埋めてやる
胃カメラに 乱れた暮らし 覗かれる
あやふやな 愛に欠かさず 水をやる
背のボタン はずしかけたら また明日
初恋も 不倫も乗せて 観覧車
ゴクゴクと ビールで涙 補充する
煩惱の 終着駅に 酒がある
まだ生きる つもりで葉 はきんどく
軒下を 可愛い嘘に 貸してやる
複眼で 見れば許せる ことばかり
マンネリの 居所少し 変えてみる
棚ボタは いつも隣に 落ちてくる
持ち物は 笑顔一つと いう身軽
錯覚が 続く眼科に 診てもらう
朝の窓 開けて青空 まず食べる
温かい 言葉待ってる 氷点下
マネキンと サイズの違い つい忘れ
リベンジに 切れた鼻緒を すげかえる
梅田地下 見よう見まねで 平泳ぎ
立つ位置を 少しずらして 妥協する

明日に賭け 安倍内閣と スキップを
古希迎え もう走らない 点滅に

第22回 MITS 懇親会

年2回親交を重ねる目的で、北摂地区の進交会懇談会が1月19日に高槻の「麟」で開催されました。アベノミクスやら尖閣諸島やら、シェイクスピアガーデンやら、話題はつきず、和気あいあいという間の2時間でした。

今回は8月の予定です。

なお、会名の MITS とは北摂各地の仁シアルです。

M：箕面市 三島郡
I：茨木市 池田市
T：高槻市 豊中市 豊能郡
S：摂津市 吹田市



幹事会報告

近畿進交会 会長 昭34商 植田美夫

(2月6日(水) 於 門真市松心会館)

出席者： 植田美夫 原 洋志 出射靖郎 内田正雄
中原悠司 小林 博 白石富男 泉 善高 森山 茂
竹田 博 麻野広行 川戸眞吾 三木得生 一色宏志
(次期幹事候補) 熊澤真一 山口 龍 古内秀樹

議題1. 本年の「近畿進交会の集い」について

11月16日(土) 12:00～大阪キャッスルホテル(昨年と同会場)に決定。(会員のご要望にお応えして11月開催に変更した。)

会費 会員7,000円 家族5,000円

集客目標70名以上、当集いの企画運営には出射・小林・白石の各副会長が当たる。総合司会は三木監査役。正式の案内は「しんこう」第55号にて案内する。

(催し物を含めその他の事項は次回幹事会で決定する。)

議題2. 本年の「若人の集い」の開催について

代表世話役に竹田幹事（決定）と平成卒幹事4名（熊澤・山口・古内・一色）が中心となって企画立案し7～8月頃の開催を目途とする。（但し応援が必要な場合は適宜支援する。）

案内状は平成卒会員全員に送る。案内状に平成卒者の名簿（卒年・氏名・住所は市、郡のみを記載）を封入する。（但し問い合わせに対しては幹事の所で全て対応できるようにする。）費用は4～5,000円とし、その半額（2～2,500円）を会費として徴収する。

議題3. 60歳定年を迎えられた方々への

アタックについて

麻野幹事が中心となって昭50年卒当りを対象に「集い」への参加を別途呼びかける。方法等は麻野幹事に企画立案をお願いし、5月の幹事会で決定する。

議題4. 役員改選について

次回の幹事会で役員改選を行う。平成卒の熊澤真一（平6文）山口 龍（平7商）古内秀樹（平7文）の3人が新しく幹事に加わることに決定した。



熊澤新幹事



山口新幹事



古内新幹事

会長から昨年は体調のことで皆さんに大変ご心をおかけ、自分でも体力に自信をなくし辞任を考えていたが10月の再入院検査でOKとなり元の生活に戻せた為、皆さんのご賛同があれば続投・留任しても良いとの発言があり、出席幹事全員の賛同で留任が内定した。

そして会長から他の幹事の方も出来るだけ留任してご協力願いたい旨の発言があった。

「しんこう」編集について、幹事全員で原稿収集の責任を持つよう小林副会長が再度原稿収集の責任分担当を説明し、幹事は責任を持って原稿収集することとし、編集長に余り負担をかけないようお願いしたいとの発言があった。

議題5. その他

次回幹事会日程 5月24日（金）松心会館

平成24年度運営会費納入者ご芳名

ご協力有難うございました

前号掲載後の運営会費納入者は次の方々です。

（25.3.10. 現在 数字は卒業年次）

（商学部）昭31 矢野健治・前田吉雄 42 鈴木康彦 47 加藤俊勝 平6 松野友明 17 松嶋宣樹

（文理学部）昭32 山名康之 53 石川清英

（医学部）平17 福本 毅 （以上今年度 合計 171名）

会員異動のご連絡

平成24年12月20日発行の「しんこう53号」発送後の会員異動です。

・昭34商 竹入正視：ご本人より、「退会希望」ハガキを受領。退会

・昭37文 尾田恭朗：平25.2.24 肺がんのため逝去

・昭40商 日隈 中：TEL・住所変更 06-7165-2136 565-0873 吹田市藤代台3-5-6-814

・昭43商 工藤邦昭：転居先不明につき抹消

・昭50商 藤原大作：転居先不明につき抹消

・昭57商 柏崎光弘：住所変更 079-424-1026 675-0038 加古川市加古川町木村42-1

・昭59商 則俊恵智子：転居先不明につき抹消

・昭52文 狩野真理子：転居先不明につき抹消

・平元化 松藤茂雄：転居先不明につき抹消

・平10文 安田恵理：転居先不明につき抹消

編集便り 編集人 昭39商 中原 悠司

「しんこう」54号は社団法人進交會会報第78号から、秋谷理事長、山本Y校校長のご挨拶を転載させていただきました。

また、森山茂さんの創作小説「告知」、原洋志さんの川柳も掲載いたしました。皆さまの感想をお寄せ下さい。「しんこう」は会員皆様のご協力成り立っています。皆様の現況、思い出、趣味などジャンルを問いません。下記編集子までお送りください。

原 洋志宛 FAX：072-682-4193

MAIL：hara_yg88@tcn.zaq.ne.jp

又は中原宛 FAX：072-729-1362

MAIL：nakahara2001@hotmail.com

「しんこう」のPDF版を進交會本部のホームページに掲載しています。ご覧ください。

「近畿進交會の集い」開催（予告）

11月16日（土）12：00～ 於 大阪キャッスルホテル（大阪天満橋）